

個人を捉えなおす ～ビッグアイ～

津久井やまゆり園が谷園舎 生活1課2寮
中井 亮
内山 満

1.はじめに

今回は今年度からグループホームを利用されているK様について、K様の意思決定支援を通じたグループホームへの移行を基に説明を行なう。

今回の事例はグループホームへの移行ありきではなくK様の希望を汲み取り、希望を大きく満たせるところがグループホームであった、という前提である。グループホームへの移行の手順を紹介するものではないということをご理解頂きたい。

意思決定支援は1つの寮、1つの意思決定支援チームで進めていたのではなく日中支援課や看護課、相談事業所など様々な部署が一丸となって進めて来たものである。

今回の発表では時間の制限があるためそのすべてを詳細に紹介することはできないことを申し添える。

2.K様の事例

(1) K様の紹介

K様は障害区分6。車を見るのが好きで車のカタログを買って居室で楽しまれている。また、明るく人懐こい性格で人当たりも良く、散歩中に地域の方とすれ違うと「こんにちは」「いい天気だよ」と気さくに挨拶をする。妹様に会うのをとても楽しみにしており毎日のように「ねえねえ妹来る？妹来る？」と支援員に話しかけている。

一方でボランティアの方など地域の方にきさくに挨拶をするが、地域の方から話しかけられると「ああ、そうですー」「はいはい」とお茶を濁しながらその場から怪訝そうに離れていく。

また、食べたいものを聞くとときに写真が掲載された紙を見せながら聞くと余白部分を指し「これこ

れ」と話し、もう一度尋ねると足早に居室に戻り、その時に質問を重ねると、怒って壁やドアを蹴る行動が見られる。

これらの行動からK様は友好的ではあるものの、一方通行の投げかけ以外の他者との交流が苦手な方だと窺える。

(2) 20679日(60年間の入所施設での生活)

約60年K様は入所施設で過ごされていた。意思決定支援のチームはこの60年間の入所施設での生活に着目した。

60年という長い年月を入所施設で過ごされる中でどれほど社会を知ることが出来たか。これはK様への経験の蓄積、情報の伝達、説明が少なかった可能性を示している。また、ご本人に分かりやすく説明を行なうという配慮が足りていなかった可能性もありうる。情報や経験がないK様は少ない選択肢の中から、選択をしなければならない事にもなる。では、その少ない選択肢を広げるためにはどうすればよいか。それは、ご本人が様々な体験を通して経験することで自ら情報を知ること、そのことで新たな望みや、希望をもっただけなのではないかと考えた。更に新たな選択肢、多くの選択肢を持ってもらえるということに気が付いた。そのため、GH体験や外出などを通して、より多くの社会資源に触れられる機会の提供をし、どのような生活があるのか、視野を広げられるように取り組むこととした。

(3) 取組み① 説明

始めに写真や動画を使ってK様と話し、丁寧に入所施設以外の生活様式があることを説明したが、確実に私たちが見て理解できるほどの興味、関心の広がりは見られず、視野を広げる事にはつながらなかった。併せて、現在の周辺地域がどういふ場所なのかを芹が谷園舎近辺の商店や施設を散策し、どういった資源があるのかを一緒に確認を行なった。また、出身地が芹が谷園舎近くの保土ヶ谷の為、過去の記憶を刺激することで、ご本人の興味・関心を引くことができないかと考え、訪問も実施した。

情報の提示として写真や動画、口頭で社会資源等の説明を行なったが、ご本人から興味・関心が引き出せなかったのは前述の通りだが、60年間入所施設で生活をされてきたK様に様々な社会資源があることを写真や動画を交え説明しても、ご本人に実感していただけることは難しい。百聞は一見に如かず、という言葉もある通り、何回も繰り返し伝えていくよりも、K様自身が新しい体験することがより理解に繋がるのではないかと。より丁寧な情報提供をすることで、K様の興味・関心を引き、ひいては新たな社会への視野を持つことが出来るのでは、といった考えから様々な体験を行なった。

(4) 取組み② 体験

体験の中でK様は様々な表現をされていたが、特に付添い職員や体験後の報告を聞いた寮職員が疑問に思ったことが複数点ある。

まずは、知らない場所でも散歩をしたり1人で離れて歩こうとする事もあるが、見学や体験中はずっと付添い職員の後をついて来ていたこと。

外部事業所の体験時に玄関から奥に入ることが出来ず、中にいる人たちに挨拶に行くこともせず、外の様子ばかりを気にしていること。

付添い職員の服の裾を引きながら「帰ろう」「帰る帰る」と職員に頼ろうとすること。

以上のことから、寮職員や相談支援専門員が共通して持っていた認識「他者との交流が苦手」この前提の認識に差があるのではないかとこの考えに至った。

(5) 取組み③ 再アセスメント

他者との交流が苦手なはずの、ご本人が職員を積極的に頼る矛盾を、チームとして検討するうえで着目した点は、「不安」であり、ご本人は不安になると安心できる場所に行くのではないかとという仮説を立てた。その目線でご本人の日常生活を見ると、知らない人が生活の場に来た際に、職員の近くにいる様子や、ご本人にとって興味が無く、戸惑ってしまう質問があった際に、安心できる、ご自分の居室に戻られる様子が見えてきた。そのことを踏まえ、チームとしては、「他者との交流が苦手なまま離れていく」ではなく「不安になると、安心出来る人や場所に行く」という視点を変えた認識を持った。

この発想の転換が意思決定支援の大きな前進の契機となった。この新しい見立てに対してなぜ、今回の体験ではこういう行動を見せたのだろうかではなく、もしかしたらこの様な行動は前々から行なっていたが職員がそのことに対して「また部屋に入って行くな」で済ませていたのではないかと。今までその様に見過ごしていたのではないかと感じた。

今回の体験でK様が新しい表現をしているのではなく、支援者がこの人はこういう人だと全てを知った気になり、それ以上ご本人を知ろうとしていなかった。ご本人が発信していることに対して支援者の視野も狭く、固定観念に囚われていたのではないかと気が付かされた。

今までの見方ではなく、新たな見方をし、そして同様に今まで見えていなかった面があるかもしれないという考えを持つ。そのことで、職員の視野が広がり、その状態から日々の生活を見ることで、より広く、深くその人を知ることになった。

体験時に本人からの発信をしっかりと支援者が捉え、その発信をチームが考察することで、本人がに希望するものを汲み取る、そしてそのことを次回の体験時に活かすことで、またご本人の一面を発見することに繋がる。この様にご本人の発信を受け取り、考察をする。これを繰り返すことで、お互いに作用し続ける、まさにかみ合ったギヤのような取り組みとなる。

より多角的にご本人を知ること、今までのアセスメントや先入観だけに捉われない、K様を知ることができた。

(6) グループホーム体験の様子

冒頭に説明したK様の人柄だが、人に興味がある・・・明るい性格・・・過干渉が苦手・・・家族が好き。これらのご本人像も私たちの視点を変えることで、グループホーム体験時には自ら同居者にテレビの内容を話しかけたり、おやつのおすそ分け、交換するような様子も見られ、友人関係のような関わりを持っていることが見受けられた。

また、知っている人が近くにいるという安心感からか作業所やグループホームの体験を繰り返して行くうちに、徐々に新たな事に対して自ら取り組んで行く様子も見られた。以上のようにご本人への視点を変えることで、ストレンクスを発見することに繋がった。

他にもストレンクスとして体験を繰り返すことで新しい環境に慣れる、新しい場所での自分の居場所を見つけるなど新しいことを取得できる方ということ知見を得ることができた。

また、生活の中に希望するものとして家族とゆっくり過ごしたい、他の人からの過度な干渉が無い自分の居場所でゆっくり過ごしたいというものもが考察出来た。体験している時の姿から新しく見えてきたこととして、入所施設での複数人の入浴では早口で数を数え上げてすぐに入浴を終える方であったが、体験を繰り返すうちに入浴時間が長くなり、ゆっくりと湯船に浸かっている様子があり、本来ゆっくりと入浴したい方だという一面を知ることができた。

グループホーム体験中に、換気のため窓を開けていると外を眺め「バスだよバス」と何が走っているのかを伝える、世話人が食事の準備をしていると、作っている所をのぞき込んで「今日はパンケーキ」と挨拶から一歩踏み込んだ会話をしていることが印象に残っている。

今までは挨拶を自分から投げかけるという交流がK様にとって心地いい関りであったのが、グループホームでの生活では関わり方が変わり、挨拶から一歩踏み込んだ問いかけ、一緒におやつを食べている方に欲しいか聞いて交換するなど自分にとって適切な距離感を保ちつつも新たな交友関係に進展していく姿が見られていた。

入所施設での生活では家族会の日には寮の玄関でいつも外を見ており、当時は妹様を待って

いて、別の利用者様の家族が来た時に挨拶をしているな、と考えていたが、グループホームでは宅配便が届くとすぐに玄関に向かい挨拶をするなど、人が訪ねてくることを楽しみにしていることがわかってきた。思い起こせば寮でも別の利用者様のご家族に挨拶するだけでなく、利用者様が帰宅する時には「いってらっしゃーい」と見送り園に戻ってくると「おかえりー」と声を掛けている姿が度々見られていた。訪れる人がいて、その時々挨拶で応対をする、そのことが好きなのではないかと気づいた。

(7) つくいこホーム(津久井やまゆり園直営のグループホーム)体験

それらの希望を叶えストレンクスに注視した生活の場はどの様なものになるだろうか。入所施設での生活は、周りには知っている人が大勢おり、安心できる環境である。しかし、過度な干渉を受ける事は苦手で、自分の時間を穏やかに過ごしたいという希望は、現在の環境では難しい状況にある。なお入所施設が悪いのではなく、施設という生活の場では叶えられる事、叶えられないことがあるということである点には留意したい。

一方で入所施設での生活よりも地域での生活の方が、より希望を叶えられうるが、知っている人がいない不安な環境に身を置くことになってしまうジレンマがある。これらの点からK様にとって住みよい環境を調べた場所がないか思案している時に、千木良園舎の近くに津久井やまゆり園が運営するグループホーム、『つくいこホーム』が開所された

新たなストレンクスとして、知っている人がいれば不安な場所に行くことや新たな取り組みに挑戦することが出来る方なのは前述のとおりである。ストレンクスを活かすためにつくいこホームの体験を行なう時には安心できる寮職員と一緒に見学・体験を行ない、グループホームという不安な場所に対して人を通して安心を支えにして繰り返し、体験していただけるよう配慮した。準備の際にも寮で職員と一緒に準備を行ない、体験に行く意識付けを入念に行なった。

また、繰り返し体験していく中で初対面の方も徐々に知人になっていくなど、段階的に安心できる人的環境が整い、また、個室という自分だけの

場所で穏やかな時間を過ごせること、ご家族が面会しやすい、1人での入浴などK様が生活に望む要素が、つくいこホームでは入所施設よりも充足しうることが分かった。

3.まとめ

以上の考察を踏まえK様は令和2年からつくいこホームでの生活を始めている。最初に述べた通りグループホームでの生活を始めることが目的なのではなく、ご本人から発信された希望を満たせる場所が、どの様な場所なのか、様々な可能性を考慮する中で、よりK様が満たされた生活を送れる場所がつくいこホームであった事実に帰結する。K様はこれからもつくいこホームで様々な体験や交流を経て、今までとはまた違う視野を持ち、それに伴い希望するものも変わっていく。その点では意思決定支援というのはいつまでも続いていくことものだと言えるだろう。

体験を通して新たなアセスメントをとってきたが、新しく発見したアセスメントはご本人が変わった結果なのだろうか。今回お伝えした通り、今まで発信してきたことを「こういう人だから」と決めつけ見ていなかった一面を改めて見つめ直すだけではいだろうか。ご本人は今までもこれからも自身であり続け、支援員の側が視点を変えてご本人を知っていかなければならないだろう。

今、我々は本当に個人を見て知っているのだろうか。この点にこれからも留意していきたい。

今回の取り組みを通して、ご本人の支援を今までの視点だけで見ているだけでは、ご本人からの信号を今まで以上にキャッチできることにはならないということに気が付いた。

今までもご本人からは表情や言葉、機嫌や行動、様々な信号で発信されて来ている。その事に気がつきながらも受け取り切れていなかったと反省をしている。

この取り組みを継続することで利用者の信号は増えてくると思っている。しかし、その信号をキャッチしなければ信号はまた見えなくなってしまうと思う。その様なことがない様に発信されている姿や思いに真摯に向き合わなければならない。また、信号を発信して頂けるだけの信頼関係を築くため

にはご本人への丁寧な支援に直結することになる。権利擁護の観点からもとても大切なことではないだろうか。

真摯に向き合っていることは大変なことだけではない。自分にしか見せない表情や笑顔。自分しかできない関わり方。向き合えば楽しいことはたくさんある。その様な支援をチームとして展開していくことが大切・必要だと感じている。

この様な支援をすることは大変だ。この様な支援をする時間も余裕もない。といった思いを持つ方もいるかもしれない。しかし、本来支援者として求められていることは、ここまで丁寧な支援と、その思いを聞く耳を持つことではないかと思っている。実践せずには他人事として捉えてもらいたくはない。実践したうえで、課題や問題を持ってもらいたいと強く感じる。

この様な取り組み発表をすると、あたかも成功事例として発表させて頂いたようになってしまう。しかし、成功事例としてだけ発信してはいけない。ご本人の声を聴き、ご本人の思いに寄り添った支援の結果、グループホームに移行したのはご本人が60才を超えた今。もっと早くこの取り組みを行ない、耳を傾け、行動していればもっと若い時から、様々な経験が出来る時間はあった。そのことでもっと早く意向に沿った支援が出来ていたのではないかとも思う。

出来なかったことに関しては、私たちもご本人は施設に入所していれば安心である、入所施設でないと生活できないという思い。入所施設にいればご本人だけでなく、家族も安心と思う時代背景もあったのかもしれない。

この方については、現在に至るまでグループホームが増えていく度、チャンスはあった。そのチャンスを活かすと言うことに以前はご両親の反対意見も強くあったことも事実である。

しかし、ご本人の意向に沿うために、グループホーム移行にいたるまで、見学や体験を様々な形で実施し、ご家族にも丁寧に伝え、時には一緒に見学や体験を行なっていればチャンスを掴むことはできたのかもしれない。今回も家族の持つ不安から、反対とは言わないまでも困惑される思いはあった。しかし、家族の思いにも向き合い、一緒に一つひとつ課題整理と課題解決をすること

令和2年度 体験交流セミナー①

で深い理解をいただくことが出来た。以前、地域移行を反対をしていたお父様を最後に理解させたのはご本人の兄弟全員でお父様に対してご本人の豊かな生活を説いて下さったご家族の関係だった。この様なことも含めて、取り組むことの大切さや意味を考えている。

この様なことから、成功事例とした取り組み報告ではなく、出来ていなかったことに気がついたという恥ずかしいような事例報告があったという厳しい視点での受け止めをしていただけると、少しでも皆様のどこかに残るのではないかと思う。